

第十六回

喜多流能楽  
Jo-fu-kai

# 條風會

能	狂言	能
国	棒	野
栖	縛	宮
金子敬一郎	山本泰太郎	友枝雄人

時をかさね あらたに たち起こる風

平成二十九年九月九日(土) 午後十二時三十分始(開場午前十二時三十分) 十四世六平太記念能楽堂

### チケットのお申し込みは

- ◆一般6,000円(前売り5,000円)
- ◆学生4,000円(前売り3,000円)
- ◆座席指定券—————2,000円

お申込み・お問い合わせ

喜多能楽堂 Tel — 03(3491)8813  
 狩野 了一 Tel Fax 03(3301)9788  
 友枝 雄人 Tel Fax 03(5950)4543  
 内田 成信 Tel Fax 03(3721)3311  
 金子敬一郎 Tel Fax 048(432)6620  
 E-Mail ticket@jo-hu.net  
 Web ————— http://jo-hu.net/  
 チケットぴあ http://t.pia.jp/  
 Pコード: 459607

### 十四世喜多六平太記念能楽堂

〒141-0021 東京都品川区大崎4-6-9



11 線、東京目黒線、都営三田線、品川東北線と品川駅下車、徒歩7分

※本楽堂には写真撮影ができませんので、おまでの写真はご遠慮ください。  
※許可撮影写真撮影、録音・録音等にはお断りいたします。

# 番組

仕舞 玉葛 狩野了一  
天鼓 内田成信

友枝雄太郎  
大島輝久  
佐々木多門  
佐藤寛泰

後シテ六条御息所の霊  
前シテ申女 友枝雄人

# 野宮

ワキ・旅僧 大日方 寛

大鼓 國川 純  
小鼓 成田 達志

笛 杉 信太郎

アイ・座敷の申人 山本則秀

後見 中村 邦生  
佐々木多門

地謡 谷 友矩  
大藤 寛泰  
佐島 輝久  
栗谷 浩之  
狩野 了夫

休憩 十分

# 棒縛

シテ・次郎冠者 山本泰太郎

アイ・太郎冠者 若松 隆  
アド・主 山本則孝

仕舞 山姥

ワキ

塩津哲生

地謡

友枝真也  
内田成信  
狩野了一  
佐々木多門

休憩 十分

# 国栖

後シテ・蔵王権現  
前シテ・老人 金子敬一郎

シテ・連・天女 金子龍展  
シテ・連・姥 塩津圭介  
子方・清見原天皇 内山利成

ワキ・供養巨下 森 常好  
ワキ・連・與昇 梅村昌功  
ワキ・連・與昇 則久英志

アイ・追手の兵 山本則重  
アイ・追手の兵 山本凜太郎

後見 塩津哲生  
内山安信

地謡 狩野 祐一  
友枝 真也  
栗谷 充雄  
佐藤 陽出  
大川 靖嗣  
香川 昭世  
友枝 昭世  
山雲 康雅

終了予定 午後五時頃

## 野宮 (ののみや)

晩秋、旅の僧が嵯峨野を訪れ、野宮の旧跡を拜んでみると、人の女が現れる。女は僧に、今日九月七日は光源氏が六条御息所をたずねてこの野宮までやって来た日なのだと言い、そのとき源氏が御息所の方に柵の枝をさし入れ、それに対して御息所が歌を詠んだことを教える。女は持つていた柵の枝を神前に供え、祈りを捧げると、僧に昔の御息所の心境を語って聞かせる。そうして女は、実は自分こそ御息所の霊なのだと言いつつ、消え失せてしまう。夜、僧が叩いていると御息所の霊が牛車に乗って現れ、賀茂祭の車争いでの辛い記憶を語り、また源氏が野宮を訪れてきてくれたときの様子を思い出して感傷に浸りつつ、舞を舞う。そして鳥居の出入りを生死輪廻の迷界にたとえつつ、また牛車に乗っていづくともなく消え失せる。所は、伊勢神宮に天皇の代理として下向する斎宮が身を清める場所である「野宮」。頃は物寂しい秋。シテは恋を失った貴婦人と様々な要件の揃う幽玄な曲。同じ六条御息所をシテにした「葉上」が諦められない愛ゆえに恨みを表すのに対し、愛を永遠とするために別れを選ぶ。外に現れる激しさはないが、内に秘められた思いは凄まじく、鳥居と小柴垣の作り物と晩秋の風景を表す詞章から想起される寂寥とした野宮の風景が御息所の心情と重なり合い、見る者に強い印象を与える。

## 棒縛 (ぼうしほり)

用があつて外出する主人は、太郎冠者・次郎冠者の召し使の一人に留守を言い付ける。しかし、二人は留守をするといつも酒を盗んで飲む悪い癖があるので、主人は一計を案じ、太郎冠者は後ろに手を縛り上げ、次郎冠者は長い棒に両手を括り付ける。不自由な身の上になつてもやはり酒を飲みたいもの、酒蔵の戸を開けた。一人は戸の前の酒壺を見て大喜びし、苦心惨憺しながら、縛られた手でお互いに酒を飲ませ合い、上機嫌になつた二人は、飲めや騒えやの酒盛りを始める。するとその真最中に主人が戻つて来る。……

## 国栖 (くさ)

清見原天皇は宮中での争いに巻き込まれ、大友皇子に追われ、都を逃げ出す。そして供奉の者に守られて吉野の山中へ身を潜める。そこへ川舟に乗って帰って来た老人夫婦は、わが家の方に星が輝き、紫雲のたなびいているのを見て、高貴な人の座すことを知る。侍臣は老人に、清見原天皇であることを明かし、何か仕上がる物を奉上げてくれと頼む。夫婦は根芹と国栖魚(鮎)を献上する。供御の残りを賜わった老翁は、吉凶を占うべく、国栖魚を川に放つと、不思議にも生き返つたので、天皇がやがて都へお帰りになる占兆だと喜ぶ。そこへ追手が迫るが、夫婦は舟の下へ天皇を隠し、敵をあざむいて追い返す。天皇は、老人夫婦の忠節に感謝し、身の拙さを嘆かれ、夫婦も涙にむせぶ。やがて、夜もふけ静まり、夫婦はなんとして御心を慰めようと思ふうちに、妙なる音楽が聞こえ、大女が現れ舞をまい、ついで蔵王権現も出現し、天皇を守護することを約し、御代を祝福する。工中の乱に材をとつたもので、清見原天皇とは、史実では大海人皇子、のちの天武天皇のこと。劇的な内容であり、王難を助ける鄙人の素朴果敢な気迫が感じられる。世阿弥が、複式夢幻能の様式を完成し、幽玄の美学を採用する以前の、古作の趣を残した、賑やかで、爽快な能。追手と老翁との問答は、非常に劇的で、空とぼけた爺さんが、次第に相手を圧倒してゆく。追手が降り、舟の下から天皇が出てからは、舞台は、寸しんみりする。しかしすぐにつづいて、天女ののびやかな舞、蔵王権現の豪快な所作があつて、一気に曲が終る。